# 勿凝学問 184

ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞と経済学者の思想
クルーグマンの受賞に思う経済状況と選考過程

2008 年 10 月 14 日
慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

Wikipedia には、ノーベル経済学賞ではなく、アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞と書かれている。その賞を、昨晩、クルーグマンが受賞したと発表される。クルーグマンの著書[1]は、昔から学生に薦めており、今年も、*The Conscience of A Liberal*

---

[1] クルーグマンの仕事は、「積極的社会保障政策と日本の歴史の転換」『年金改革と積極的社会保障政策――再分配政策の政治経済学Ⅱ』（175 頁、188 頁）に出てくる。せっかくなので、彼の研究紹介もかねてその箇所を紹介しておく。

175 頁

> この時期に新しい成長理論が登場してきたのは、不完全競争モデルの分析手法や、収穫逓増という前提を組み込んだモデル構築の手法が開発されたのが 1980 年代であったからと考えられる。それまでは、たとえば「収穫が逓増する市場を分析するための数学的手法はなかった」〔Arthur(1994)、p.103〕。したがって、当時は、理論上の厳密性とエレガントさを追求しようとすれば、完全競争や収穫逓減という相当に非現実的な仮定にもとづかざるを得ず、モデルの仮定を現実味のあるものにすれば、理論的な厳密さ･エレガントさが損なわれるというジレンマの中にあった。そして多くの理論家は、前者の道を選択していた。ところが、1980 年代に、一部の経済理論家たちが「定性的ダイナミクス(qualitative dynamics)と確率論の高いテクニックを用いて、収穫逓増市場を解析する手法を開発し」〔Arthur(1994)、p.103〕、実態に即した経済モデルを構築する上での技術的障害が少しずつ取り除かれるようになってきた。と同時に、Grossman and Helpman(1990)、Romer(1990)、Aghionand Hewitt(1992)などの「新しい成長理論」としての「内生的成長理論」や、Krugmann(1994b)に既刊論文がまとめられている「新しい貿易理論」などが生まれてきた*。Grossman and Helpman(1990)、Romer(1990)、Aghion and Hewitt(1992)による内生的成長理論は、民間企業が独占利潤を得る目的のために R&D 投資を行い、その結果としてのイノベーションが、経済成長の源泉であるとするシュンペーターのアイデアをモデル化したものであるために「シュンペーター型成長モデル」と呼ばれている。シュンペーターは、1930 年代から 1940 年代初期にかけての著作でこのモデルを先見していた。だが、このモデルは不完全競争を前提としていたために、数学という言語を用いてモデル化されるためには 1980 年代の不完全市場分析の手法開発を待たねばならなかった。なお、同時期に、アーサーなどを中心に、サンタフェ研究所で収穫逓増や経路依存性の経済学的意味が検討されていた。サンタフェ研究所の研究は「複雑性の経済学」として広く知られているが、この経済学は、同時期に貿易理論や成長理論の側面で起こっていた経済学進化の方

を読んだときには紹介し、この本の翻訳『格差はつくられた』が出たときには、「なんだ、このタイトルは！？」と、文句を言いながら学生に紹介した。そのクルーグマンが、昨日受賞した。

これで、わたくしが学生によく紹介する、3 人の経済学者、アマーティア・セン、スティグリッツ、そしてクルーグマンは、皆そろって、ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞の受賞者になったわけである。

すばらしいではないかぃ。

センは 1998 年、スティグリッツは 2001 年、クルーグマンは 2008 年に受賞している。彼らが受賞した年の前年、すなわち 1997 年にヘッジファンドの破綻を機にしたアジア通貨危機が発生し、2000 年にネットバブルがはじけ、2007 年にはサブプライム問題が露見しその影響で 2008 年 10 月、大恐慌を超えると言われる危機的な経済状況の中で受賞が発表されている。そうした事実が、わたくしがお薦めする経済学者の受賞となにか関係があるのだろうかなどと言わずに、素直に言祝いでおこうと思う。

ちなみに、わたくしは、ゼミの第 1 期から今の第 10 期まで継続して、まったく同じ課題「歴史を動かした人、思想、理論」を課している。センの人物が分かる適当な文章がなかったので、第 1 期の学生荻澤紀子さんが 4 年生の時に、センの小伝を書いてもらった。こ

---

向と成果と比べて、その中身に大差はない。なお、アーサーが、ヒックスを引用して論じているように、かつて、＜収穫逓増という仮定＞は既存の経済理論の根幹を揺るがすおそれのあるものとみなされていた〔Arthur(1994)、p.102〕。

*Krugman、P. (1994a), Competitiveness: A Dangerous Obsession," *Foreign Affairs*、73(2)、28-45.

————(1994b), *Rethinking International Trade*, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.〔P.クルーグマン／高中公男訳(2001)『国際貿易の理論』文眞堂〕

188 頁

さらにここでひとつ抱かれる、青木・吉川モデルに関する疑問を記しておこう。このモデルは、日本に富をもたらす基幹産業を養成するという戦略的通商政策につながる可能性を持っている。そしてこの戦略的通商政策というものは、一見すれば、QUERTY 経済学にもとづいて新しく構築された国際経済学との整合性を持つかのようにみえる。けれども、この新しい国際経済学を開発したクルーグマンたちや、他にサマーズなども、成長する産業を事前に選択する政治的・技術的難しさ、および仮に選択した産業が成長したとしても国富への貢献がほんのわずかにしかならないことを指摘している。それゆえに彼らは、戦略的通商政策は利益集団に支えられた旧来型の保護貿易政策に利用されるだけだとして、この政策に強く反対するクルーグマンやサマーズのこうした言い分は、もっともなことではあろう。

の小伝をここに紹介しておこうと思う。是非ともどうぞ。

「アマルティア・センのお話」

　他に、ガルブレイスの『バブルの物語』も、読んでもらっているのだが、絶版になって早数年。学生さん達が、毎年困っていますので、復刻版のご決意をよろしくお願いします。この本ほど、読者の財産を生涯にわたって守ってくれるものはありません――財産を増やしてくれはしませんけどね。

参考
勿凝学問 20　ノーベル経済学賞と学問としての経済学、そしてノーベルが思いを込めた平和賞

後日　11 月 16 日　ゼミ卒業生より
　　お久しぶりです。
　　・・・

　　勿凝学問 184『ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞と経済学者の思想――クルーグマンの受賞に思う経済状況と選考過程』を拝見させていただきました。
　　・・・
　　ところで、ご存知かもしれませんが、勿凝の最後に出てくる『バブルの物語』（ガルブレイス）は、私の勤めている会社から出版されていたりします。そして、お書きの通り絶版になっていました。

　　しかし、昨今の世界的金融危機をきっかけに、改めてガルブレイスに脚光が当たっているということで、新版として 12 月 4 日に復刻することとなりました。
　　・・・
　　歴史から学ぶことなく金融バブルの崩壊が繰り返され、それが再び現実になった今だからこそ、ガルブレイスが読まれているのでしょうか。

　　先生が復刻版についてのコメントをお書きになっていたので、お知らせしたくて久しぶりのメールをさせていただきました。
　　それでは、失礼いたします。

ゼミ第１期から必読の書として薦めている本が、絶版、復刻という運命を辿ったのは３冊目。これで、絶版になった本の復刻率１００％を達成できた――ありがとよ、にっち。